

未来に対する想起と死に対する態度の研究 —青年、中年、老年の年代比較から—

Study of the future recall and the attitudes toward death
— From the age group comparison of adolescents, middle-aged, and elderly people —

キーワード：青年、中年、老年、時間的展望、DAS、DAP

Keywords : adolescents, middle aged, elderly, time perspective, DAS, DAP

佐々木直美

SASAKI Naomi

山口県立大学大学院健康福祉学研究科

Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

要旨

本研究は以下の2つの問題を明らかにすることを目的とした。1つは未来を想起したときに死という考えが自発的に起こる年代を知ることであり、もう1つは死の不安と死に対する態度を、横断的手法を用いて比較することより、年代の特徴を知ることである。研究対象者は、青年117名、中年142名、老年202名であった。データは、質問紙調査で集められ、対象者は死別体験、抑うつ、死の不安、死に対する態度に関して回答した。また、未来に対する想起については自由記述を求め、内容分析を用いて検討した。死に対する態度はDAP (Death Attitude Profile)尺度を使って評価され、「死の恐怖」因子、「回避的受容」因子、「積極的受容」因子、「中立的受容」因子の4因子構造であることが確認された。死の不安と死に対する態度のデータは年齢群×性別、年齢群×死別経験、年齢群×抑うつを独立変数とする2要因分散分析を用いて検討した。その結果、死の考えが自発的に出てくるのは、ほぼ老年期からであることが示された。死の不安と「死の恐怖」因子は青年群が他の年代よりも高かった。「回避的受容」因子、「積極的受容」因子、「中立的受容」因子は他の年齢群よりも老年群で高かった。これらの結果は先行研究と同様の結果であった。内容分析では、未来に対する想起の内容は、すべての年代に共通して以下の6つのカテゴリーが得られた。【現在の生活の継続】 【これからの生き方】 【家族】 【健康・病気】 【死や死後】 【分からない、考えない】であった。

The purpose of this study was to clarify the following two questions. One was to know the age when the idea of death occurred spontaneously when recalling the future, and the other was to know the characteristics of the age by comparing the anxiety of death and the attitude toward death using a cross-sectional method. The subjects of the study were 117 adolescents, 142 middle-aged, and 202 elderly. The data were collected in a questionnaire survey, and the subjects answered about bereavement experience, depression, the anxiety of death, and the attitude toward death. In addition, we asked for a free description of the recollection of the future and examined it using content analysis. Attitudes toward death were evaluated using the DAP (Death Attitude Profile) scale and confirmed to have a four-factor structure of “Fear of Death” factor, “Escape-Oriented Death Acceptance” factor, “Approach-Oriented Death Acceptance” factor, and “Neutral Death Acceptance” factor. Data on the anxiety of death and the attitude toward death were examined using a two-factor analysis of variance with age group x gender, age group x bereavement experience, and age group x

depression as independent variables. As a result, it was shown that the idea of death spontaneously appeared from almost old age. Anxiety of death and “Fear of Death” factors were higher in the adolescent group than in other age groups. “Escape-Oriented Death Acceptance” factor, “Approach-Oriented Death Acceptance” factor, and “Neutral Death Acceptance” factor were higher in the elderly group than in other age groups. These results were similar to those in previous studies. In the content analysis, the following six categories were obtained for the contents of the future recall, which are common to all age groups. [Continuation of current life],

I. 緒言

心理学において、時間的展望とはレヴィン¹⁾によれば「ある一定時点における個人の心理学的過去、および未来についての見解の総体」と定義されている。時間的展望には、人が自己の過去や未来にどのような出来事を想起あるいは予想するかという認知的側面と個人が自己の過去や未来に対してどのような感情を持っているかという情緒的側面の2つが含まれている²⁾。佐々木³⁾は、高齢者に対して過去、現在、未来に対する想起内容を尋ねた結果、「自分や家族の健康」「老後」「孫」「死」「子ども」などが挙げられたことを報告している。しかしこれは高齢者のみを対象としており、他の年齢群は未来をいかに想起しているのかについては分かっていない。そこで本研究では、時間的展望の認知的側面において、「死」に注目した。

死については、幼い頃から、例えば書籍の中で登場人物が亡くなることやペットの死などを通して経験することがある。しかしその死がいずれ自分にも起こることというようには、無意識として感じるかもしれないが、意識的には結び付きにくいと考える。あるいは結びついたとしても、その考えは時折出現し、また消えていくということを繰り返すのではなかろうか。しかし、年齢や体調などから、死が身近なものとして現実味を帯びてきたとき、死は意識され、その時は、時折出現するというよりは死の意識と共に生きることになるのではなかろうか。このように考えた場合、「死」という考えが自発的に表れ、言葉として語られるのはどの年齢段階からかということが本研究の問いである。また死の意識と共に生きるということは死の受容を示していると考えられる。よって、死の受容についてもどの年齢段階から起こるのかということについて「死」に対する不安や態度に関する年代比較を通して検討したい。

死の捉え方、感じ方について、先行研究では死への不安や死に対する態度として検討されてきた。これまで死に対する態度を測定する尺度は、いくつか開発されている。一つには、Gesserら⁴⁾が作成したDAP (Death Attitude Profile) であり、この尺度では「死

の恐怖」「積極的受容」「中立的受容」「回避的受容」の4因子構造であることが述べられている。また、日本においても同じ4因子構造であることが河合ら⁵⁾によって確認されており、60歳以上の高齢者では、死の恐怖に配偶者や子の有無が、死の受容には学歴、信仰、死別体験等が影響することを見出している。このDAPはその後、Wongら⁶⁾によって改訂版 (DAP-R) が出され、「死の恐怖」「接近的受容」「逃避的受容」「死の回避」の4因子からなり、DAPとは項目数も質問内容も異なるものになっている。隈部⁷⁾によるDAP-Rを用いた研究では、高齢者は青年、中年よりも死の恐怖が低く、受容や回避が高いという結果を得ている。その他にも、丹下⁸⁾が青年用として「死に対する恐怖」「生を全うさせる意志」「人生に対して死がもつ意味」「死の軽視」「死後の生活の存在への信念」「身体と精神の死」の6因子を持つ「死に対する態度尺度」を作成している。この青年用の項目から「死の軽視」の因子を除いた5因子の中老年用 (ATDS-A) の尺度⁹⁾もある。このように、死に対する態度について年代別に検討されている。しかし、同一の尺度を用いながら青年、中年、老年と横断的に、年代比較を行った研究は少ない。

よって本研究においては、青年、中年、老年者が未来を想起したときに考える内容について明らかにし、死への不安、死に対する態度について年代比較を行うことを目的とする。

II. 方法

1. 対象者と実施方法

本研究は、青年、中年、老年を対象として質問紙調査を行った。青年は、A県の2つの大学において講義終了後に質問紙調査を実施し、回収ボックスを設けて回収を行った。中年については、A県において選挙管理委員会の許可を得て選挙人名簿を閲覧し、35歳から55歳に該当する者に対して性別が均等になるように考慮し、郵送法で実施し、返信用封筒にて回収を行った。老年に関しては、A県の地域福祉やボランティア活動に関心のある方が定期的に受講される講座の後に配布

し、郵送にて回収を行った。なお調査は2006年7月～2007年3月に実施した。

2. 測定尺度

本研究の測定尺度は以下の①～⑤からなる。加えて、老年のみ、一人暮らしや配偶者と同居などの居住状況についても尋ねた。

1) 基本属性

性別、年齢、死別体験について尋ねた。性別は「男性」「女性」からの選択式、年齢は記述式とし、死別体験は5年以内において親しい人（家族や親戚、友人）との死別経験の有無について「あり」「なし」から選択させた。

2) 未来について想起する内容

未来について考えた時に、どのようなことを思い浮かべるかについて自由記述にて尋ねた。

3) SDS (Self-rating Depression Scale)

Zung¹⁰⁾によって作成され、福田ら¹¹⁾によって邦訳された自己評価式抑うつ尺度である。抑うつ症状を問う20項目からなり、抑うつ状態の程度を簡便に測定できる。「ほんといつもある」「かなりのあいだある」「ときどきある」「たまにあるかほとんどない」の4件法で回答を求めた。

4) DAS (Death Anxiety Scale)

Templer¹²⁾によって作成された死の不安を測定する尺度である。岡村¹³⁾や木村ら¹⁴⁾は邦訳して研究に用いている。1因子15項目からなり、「はい」「いいえ」の2件法で回答を求めた。項目としては、「私が死ぬのがとてもこわい」「死について私はほとんど考えない」「人々が死について話すのを聞いても私は気にならない」などがある。

5) DAP (Death Attitude Profile)

Gesserら⁴⁾によって作成された死に対する態度を測定する尺度である。河合ら⁵⁾は邦訳して研究に用いている。「死の恐怖」「積極的受容」「中立的受容」「回避的受容」の4因子で構成される21項目からなり、「とてもそう思う」「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」「まったくそう思わない」の5件法で回答を求めた。項目としては、「死の恐怖」因子は、「苦しんで死ぬのが怖い」「自分自身の死を予想すると不安になる」などの7項目であり、「積極的受容」因子は、「死は永遠の幸福な場所への道だと思う」「私が死んだら天国に行くと思う」などの4項目であり、「中立的受容」因子は、「死は単に生命の過程の一部である」「私は死について心配してもしようがないと思う」などの4項目であり、「回避的受容」

因子は、「私は生きることによってうんざりしている」「私の人生を伸ばすことにどんな目的も意味もみつからない」などの6項目である。

3. 分析方法

1) 未来に関する思考については、自由記述をもとに、クリッペンドルフ¹⁵⁾の内容分析の手法を用いて行った。まず自由記述を1つのコードとした。次に類似した意味内容の要素を集めて、それらを表す表現に書き換えてサブカテゴリー（以下〔 〕）とした。続いてサブカテゴリーも同様に類似の意味内容を集約してカテゴリー（以下【 】）とした。

2) 年齢群（青年・中年・老年）、性別（男・女）、死別経験（あり・なし）、SDS（抑うつ）得点を独立変数とし、DAS、DAPを従属変数とした量的分析を行った。年齢群と性別、年齢群と死別経験、年齢群とSDSについてそれぞれ2要因の分散分析を行った。SDSは、カットオフ値が40点となっており、40点以下であれば「抑うつ状態乏しい」、40点台では「軽度抑うつ状態あり」、50点以上であれば「中等度抑うつ状態あり」とされているため¹⁰⁾、本研究においても40点以下と41点以上の2群に分類して分析を実施した。

4. 倫理的配慮

調査用紙の冒頭において、調査の題名と目的、無記名調査であるため個人情報特定されないこと、研究参加の意思は自由であること、回答途中でも研究参加をとりやめることができること、学会発表や論文投稿という形で公表すること、回答の回収の方法、問い合わせ先について明記した。

Ⅲ. 結果

1. 対象者

青年は、117名に配布し、117名の回答を得た。中年は300通郵送し、145通の返信があった（回収率48.3%）。老年は210名に配布し、210名の回答を得た。それらのうち、大幅に欠損があるものが8部あり、3か所までの未記入があるものが11部（青年0部、中年3部、老年8部）あった。そのため、大幅に欠損があった8部は分析対象から除外し、3か所までの未記入があった11部については、その値の平均値を入れることで分析対象として含めた。その結果、青年117名（男性44名、女性73名；平均年齢19.27±1.01歳）、中年142名（男性67名、女性75名；平均年齢46.32±5.89歳）、老年202名（男性85名、女性117名；平均年齢70.55±3.47歳）を分析対象とした。なお老年の居住状況を表1に示す。この表1によれば、本研究の老年者は、男性で

は全体のうち約5%が一人暮らしで、それ以外は配偶者や子といった同居人がおり、女性では全体のうち約半数弱が一人暮らしであった。

表1 老年群の移住状況

	男性	女性
一人暮らし	4	43
配偶者と2人暮らし	60	37
配偶者と子と同居	12	15
子と同居	5	19
配偶者と老親と同居	3	1
その他	1	2
計	85	117

2. 未来に関する想起内容

青年、中年、老年の未来に関する想起内容の結果を表2に示す。未来に関する想起内容については、【現在の生活の継続】 【これからの生き方】 【家族】 【健康や病気】 【死や死後】 【分からない、考えない】 という6つのカテゴリーが抽出された。ここでは、各年

齢群の特徴について、コードの数が上位を占めるものを中心に上げる。

【現在の生活の継続】 においては、青年群は【休日の過ごし方】や【就職】が多く、中年群は【老後】、【仕事】が多く、老年群は【老後】が多かった。【これからの生き方】は、どの年齢群も共通して多く挙がっていた。

【家族】については、青年群は【結婚】、中年群、老年群は【子ども】【家族】が多かった。【健康や病気】については、青年群はごくわずかであり、中年群は【健康】、老年群は、【健康】や具体的な疾患名や病態を示す【病気】が挙がっていた。【死や死後】については、青年群、中年群はごくわずかであり、老年群になると【人生の終わり方】について挙がっていた。【分からない、考えない】については、青年群は【考えていない】、中年群は【考えても仕方がない】、老年群は【考えても仕方がない】と【分からない】が多かった。すなわち、本研究の問いであった、未来を考えた時に「死」が浮かんでくるのは、ほぼ老年になってからであることが示された。

表2 未来に関する想起内容の分析結果（表内の数字は該当コードを回答した人数）

カテゴリー	サブカテゴリー	青年	中年	老年	コードの例
現在の生活の継続	老後	0	17	24	年をとった時にどこでどう過ごしているか・定年後の過ごし方（中年） 一人暮らしになったときの不安・1日1日大切に過ごす（老年）
	サークル・趣味	3	12	9	スポーツ・旅行・音楽鑑賞など（青年、中年、老年）
	アルバイト（青年のみ）	3	16	3	アルバイトの仕事内容（青年）
	仕事（中年・老年のみ）	3	16	3	仕事の熟練・仕事の引退・再就職（中年） 現在の仕事の継続（老年）
	金銭	1	3	5	生活費（青年、中年、老年）、相続の問題（老年）
	世の中	0	4	9	日本の将来・世の中が平和であること（中年、老年）
	休日の過ごし方	12	1	0	休日をどう過ごすか（青年、中年）
	明日	2	0	0	明日の予定（青年）
	試験	3	0	0	大学の講義科目の試験がうまくいくか（青年）
	就職	45	0	0	どこで働くか・何の仕事をするか（青年）
これからの生き方	これからの生き方	48	34	25	20代をどう生きるか（青年）、これから先の人生をどう生きていくか（青年、中年、老年） 社会に恩返ししたい・自分のやりたいことを続ける（老年）
家族	子ども	0	31	10	子どもの成長・将来（中年、老年）
	家族	0	17	9	家族の健康（中年、老年）、自身の死後において残された配偶者のこと（老年）
	老親	0	2	3	親がいつまで元気であるか・親との別れ（中年、老年）
	孫	0	0	7	孫の成長・将来（中年、老年）
	結婚	7	0	0	いつ結婚するか（青年）
健康や病気	健康	0	10	35	いつまで元気でいられるか（中年、老年）
	病気	1	0	17	病気（青年）、認知症・寝たきり（老年）
死や死後	残りの命	1	1	4	いつまで生きられるか（青年、中年、老年）
	人生の終わり方	0	0	23	人の世話にならないようピンピンコロリでいきたい、どんな死に方をするのか
	死後	0	0	2	死後はどこに行くのか
分からない、考えない	考えていない	2	0	0	考えていない（青年）
	考えても仕方がない	0	5	7	考えても仕方がない（中年、老年）
	分からない	0	0	8	どうなるのか分からない（老年）

3. 年齢群と性別、死別経験、抑うつの違いによる DAS、DAPの比較

1) DASの各項目に関する年齢群の反応率

DASの各項目に関する年齢群の反応率を表3に示す。

2) DAPの因子分析

因子分析を行い、因子構造を確認した。河合ら⁵⁾と同様に主因子法バリマックス回転を採用し4因子に固定して分析を実施した。その結果を表4に示す。河合らは第1因子が死の恐怖、第2因子が積極的受容、第3因子が中立的受容、第4因子が回避的受容であったが、本研究では順序が入れ替わり、第1因子が死の恐怖、第2因子が回避的受容、第3因子が積極的受容、第4因子が中立的受容であった、各因子内の項目は河合と同様であったが、項目「痛みは恐ろしいが、死は痛みからの救済だから死を恐れることはない」についてのみ、複数の因子に同程度の因子負荷量を有していた。しかし河合ら⁵⁾も、同項目は複数の因子に同程度の因子負荷量を有しており、Templer¹²⁾の因子構造と同じになるよう回避的受容の項目としていたため、本研究も同様に行った。なお各因子の信頼性係数も河合らと同程度の高さを有していた。

年齢群と性別、年齢群と死別経験を独立変数とし、DAS、DAP（「死の恐怖」因子、「積極的受容」因子、「中立的受容」因子、「回避的受容」因子）を従属変数として2要因の分散分析を行った結果を以下に

示す。なおF値、自由度、有意水準については表5～表7に示す。

(1) 年齢群と性別

DAS：年齢群および性別において主効果が認められた。中年群、老年群よりも青年群の方が、男性よりも女性の方がDAS得点が高かった。

「死の恐怖」因子：年齢群において主効果が認められた。中年、老年よりも青年群の方がDAS得点が高かった。

「積極的受容」因子：年齢群および性別において主効果が認められた。青年、中年群よりも老年群の方が、男性よりも女性の方が因子の得点が高かった。

「中立的受容」因子：年齢群において主効果が認められた。青年群、中年群よりも老年群の方が因子の得点が高かった。

「回避的受容」因子：年齢群において主効果が認められた。青年群、中年群よりも老年群の方が因子の得点が高かった。

(2) 年齢群と死別経験

DAS、死に対する態度のすべての因子において、死別経験の主効果および、年齢群と死別経験の交互作用は認められなかった。

(3) 年齢群と抑うつ

DAS：年齢群と抑うつ高低群において交互作用が認められた。SDS低群においては、中年、老年群よりも

表3 死の不安尺度 (DAS) の項目とその反応率 (%)

項目	青年		中年		老年	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
1 私は死ぬのがとてもこわい	56	44	48	52	33	67
2 死について私はほとんど考えない	54	46	54	46	49	51
3 人々が死について話すのを聞いても私は気にならない	79	21	58	42	41	59
4 手術が必要になるのではないかと考えると恐ろしい	69	31	57	43	52	48
5 私は死ぬことをまったく恐れていない	85	15	81	19	63	37
6 癌になることを特に恐れてはいない	76	24	71	29	57	43
7 死について考えても、私は決して思い悩まない	68	32	52	48	43	57
8 時間が飛ぶように過ぎていくことでときどき悩む	71	29	40	60	52	48
9 私は苦しんで死ぬのが怖い	85	15	80	20	80	20
10 死後の世界で自分がどうなるのかと、私はとても悩んでいる	21	79	7	93	11	88
11 私は心臓病の発作が起こることを非常に心配している	24	76	13	87	28	72
12 人生がどんなに短いかということをよく考える	38	62	26	74	38	62
13 戦争に巻き込まれるかもしれないと人々が話しているのを聞くとぞっとする	69	31	48	52	63	37
14 死体を見ると非常に怖い	80	20	54	46	51	49
15 私にとって未来には恐れるものは何もないと思う	85	15	82	18	53	47

青年群の方がDAS得点が高く、SDS高群においては、老年群よりも青年群の方がDAS得点が高かった。また、中年群、老年群においては、SDS得点低群よりも高群がDAS得点が高かった。

「死の恐怖」因子：抑うつ高低群において主効果が認められた。SDS低群よりも高群の方が因子の得点が高かった。さらに年齢群とSDS高低群において交互作用が認められた。SDS低群においては、中年、老年群よりも青年群の方が因子の得点が高かった。また、中年群、老年群においては、SDS得点低群よりも高群が因子の得点が高かった。

「積極的受容」因子：いかなる有意差もみられなかった。

「中立的受容」因子：年齢群とSDS高低群において交互作用が認められた。SDS低群においては、青年、中年、老年群の順で因子の得点が高く、SDS高群においては、青年、中年群よりも老年群の方が因子の得点が高かった。また青年群においては、SDS低群よりも高群の方が因子の得点が高かった。

「回避的受容」因子：SDS高低群において主効果が認められた。SDS低群よりも高群の方が因子の得点が高かった。

表4 DAPの因子分析の結果

項目	因子負荷量				
	I	II	III	IV	
【死の恐怖】 (7項目 $\alpha=.73$)					
3 暴力によって死んでいくことが心配だ	0.28	0.09	-0.01	0.04	
7 苦しんで死ぬのが怖い	0.65	-0.03	-0.02	0.04	
8 私にとって、死の最終的な事実におくせずに立ち向かうことは難しいと思う	0.59	-0.01	-0.07	-0.20	
10 時ならぬ時に死ぬのではないかと心配だ	0.52	0.08	-0.03	-0.21	
14 私は、ゆっくりと死んでいくのがこわい	0.41	0.22	0.05	0.01	
17 人生は短いと思うと、心がゆらぐ	0.58	-0.08	0.05	-0.01	
20 自分自身の死を予想すると、不安になる	0.74	-0.19	-0.06	-0.18	
【回避的受容】 (6項目 $\alpha=.74$)					
2 私は、生きることにうんざりしている	0.05	0.65	-0.05	0.06	
6 私の人生を延ばすことに、どんな目的も意味もみつからない	0.02	0.58	0.05	0.23	
12 この世に期待するものは、なにもないと思う	0.06	0.70	0.10	0.14	
15 死は、私にとって別にどうでもいいことだ	-0.19	0.43	0.04	0.39	
18 痛みは恐ろしいが、死は痛みからの救済だから、死を恐れることはない	-0.12	0.21	0.41	0.38	
21 死は、私の人生の重荷からの救済だと思う	0.15	0.58	0.41	0.07	
【積極的受容】 (4項目 $\alpha=.69$)					
1 死は、永遠の幸福な場所への道だと思う	-0.11	0.11	0.64	0.12	
11 私は、死後の世界を楽しみにしている	-0.10	0.16	0.59	-0.01	
13 私が死んだら、天国に行くと思う	0.12	-0.21	0.45	0.06	
19 天国は、この世よりとても良いところだと思う	0.05	0.05	0.72	0.01	
【中立的受容】 (4項目 $\alpha=.59$)					
4 死は、単に生命の過程の一部である	-0.02	0.24	0.16	0.42	
5 私は、死を恐れないし、歓迎もしない	-0.27	0.16	0.17	0.60	
9 私は、死について心配してもしようがないと思う	-0.20	0.05	0.00	0.46	
16 私たちすべては、死ななければならないという事実をしかたがないと、あきらめている	0.24	0.07	-0.03	0.54	
	固有値	2.46	2.09	1.9	1.56
	分散	11.72	9.97	9.06	7.42

表5 年齢群と性別を独立変数としDAS、DAPを従属変数とした2要因分散分析結果

		男性	女性	分散分析	F値	多重比較
死の不安	青年群	N	44	年齢群主 効果	21.1**	青年>中年、老年
		M	9.43			
		SD	3.32			
	中年群	N	67	性別主効 果	7.95*	女性>男性
		M	7.27			
		SD	3.45			
	老年群	N	85	年齢群× 性別	2.24	
		M	6.05			
		SD	4.04			
<hr/>						
		男性	女性	分散分析	F値	多重比較
死の恐怖	青年群	N	44	年齢群主 効果	4.49*	青年>中年、老年
		M	21.82			
		SD	5.62			
	中年群	N	67	性別主効 果	1.79	
		M	20.79			
		SD	4.20			
	老年群	N	85	年齢群× 性別	1.11	
		M	19.88			
		SD	4.93			
<hr/>						
		男性	女性	分散分析	F値	多重比較
積極的受容	青年群	N	44	年齢群主 効果	10.04**	老年>青年、中年
		M	8.50			
		SD	2.74			
	中年群	N	67	性別主効 果	15.73**	女性>男性
		M	9.49			
		SD	3.01			
	老年群	N	85	年齢群× 性別	2.16	
		M	10.07			
		SD	2.63			
<hr/>						
		男性	女性	分散分析	F値	多重比較
中立的受容	青年群	N	44	年齢群主 効果	20.13**	老年>青年、中年
		M	12.66			
		SD	3.07			
	中年群	N	67	性別主効 果	0.36	
		M	12.82			
		SD	2.96			
	老年群	N	85	年齢群× 性別	0.57	
		M	14.25			
		SD	2.44			
<hr/>						
		男性	女性	分散分析	F値	多重比較
回避的受容	青年群	N	44	年齢群主 効果	7.63**	老年>青年、中年
		M	12.86			
		SD	5.17			
	中年群	N	67	性別主効 果	0.15	
		M	13.40			
		SD	3.45			
	老年群	N	85	年齢群× 性別	1.23	
		M	14.27			
		SD	2.76			

*p<.05 **p<.01

表6 年齢群と死別経験（あり・なし）を独立変数としDAS、DAPを従属変数とした2要因分散分析結果

		あり	なし	分散分析	F値	多重比較
死の不安	青年群	N	60	年齢群主 効果	17.29**	青年>中年、老年
		M	9.38			
		SD	3.28			
	中年群	N	79	死別主効 果	0.12	
		M	7.72			
		SD	3.36			
	老年群	N	160	年齢群× 死別	0.18	
		M	7.07			
		SD	3.68			
<hr/>						
		あり	なし	分散分析	F値	多重比較
死の恐怖	青年群	N	60	年齢群主 効果	4.53*	青年>中年、老年
		M	21.92			
		SD	5.19			
	中年群	N	79	死別主効 果	0.13	
		M	20.73			
		SD	4.72			
	老年群	N	160	年齢群× 死別	0.21	
		M	20.67			
		SD	4.51			
<hr/>						
		あり	なし	分散分析	F値	多重比較
積極的受容	青年群	N	60	年齢群主 効果	6.25**	老年>青年、中年
		M	9.13			
		SD	2.98			
	中年群	N	79	死別主効 果	0.05	
		M	9.80			
		SD	2.73			
	老年群	N	160	年齢群× 死別	1.94	
		M	10.81			
		SD	2.55			
<hr/>						
		あり	なし	分散分析	F値	多重比較
中立的受容	青年群	N	60	年齢群主 効果	18.7**	老年>青年、中年
		M	12.27			
		SD	3.28			
	中年群	N	79	死別主効 果	0.01	
		M	13.00			
		SD	2.78			
	老年群	N	160	年齢群× 死別	0.28	
		M	14.18			
		SD	2.27			
<hr/>						
		あり	なし	分散分析	F値	多重比較
回避的受容	青年群	N	60	年齢群主 効果	5.17**	老年>青年、中年
		M	13.80			
		SD	4.86			
	中年群	N	79	死別主効 果	3.79	
		M	13.30			
		SD	3.61			
	老年群	N	160	年齢群× 死別	0.26	
		M	14.63			
		SD	3.38			

*p<.05 **p<.01

表7 年齢群とSDS得点（高群・低群）を独立変数としDAS、DAPを従属変数とした2要因分散分析結果

		低群	高群	分散分析	F値	多重比較	
DAS	青年群	N	29	88	年齢群主 効果	14.83**	青年>中年、老年
		M	9.79	9.49			
		SD	3.33	3.04			
	中年群	N	74	68	SDS高低 群主効果	8.77*	SDS得点低群：青年>中年、老年 SDS得点高群：青年>老年
		M	6.62	8.79			
		SD	3.18	3.08			
	老年群	N	136	66	年齢群× SDS高低	3.70*	中年群：SDS得点高群>低群 老年群：SDS得点高群>低群
		M	3.65	3.51			
		SD	7.00	3.69			
		SDS40点以下	41点以上	分散分析	F値	多重比較	
死の恐怖	青年群	N	29	88	年齢群主 効果	3.31*	青年>中年、老年
		M	22.48	22.14			
		SD	5.54	4.82			
	中年群	N	74	68	SDS高低 群主効果	14.64**	SDS得点低群：青年>中年、老年
		M	19.12	22.41			
		SD	4.62	3.75			
	老年群	N	136	66	年齢群× SDS高低	4.53*	中年群：SDS得点高群>低群 老年群：SDS得点高群>低群
		M	19.87	22.30			
		SD	4.24	4.53			
		SDS40点以下	41点以上	分散分析	F値	多重比較	
積極的受容	青年群	N	29	88	年齢群主 効果	9.00**	老年>青年、中年
		M	9.17	9.68			
		SD	2.14	3.27			
	中年群	N	74	68	SDS高低 群主効果	0.75	
		M	10.16	9.09			
		SD	2.79	2.51			
	老年群	N	136	66	年齢群× SDS高低	2.36	
		M	10.80	10.62			
		SD	2.69	2.61			
		SDS40点以下	41点以上	分散分析	F値	多重比較	
中立的受容	青年群	N	29	88	年齢群主 効果	21.69**	老年>中年>青年
		M	11.38	12.61			
		SD	3.05	2.93			
	中年群	N	74	68	SDS高低 群主効果	0.32	SDS得点低群：老年>中年>青年 SDS得点高群：年齢群老年>青年、中年
		M	13.09	12.68			
		SD	2.85	2.69			
	老年群	N	136	66	年齢群× SDS高低	3.20*	青年群：SDS得点高群>低群
		M	14.34	13.98			
		SD	2.25	2.53			
		SDS40点以下	41点以上	分散分析	F値	多重比較	
回避的受容	青年群	N	29	88	年齢群主 効果	15.84**	老年>青年、中年
		M	10.72	14.09			
		SD	3.00	4.86			
	中年群	N	74	68	SDS高低 群主効果	46.69**	SDS得点高群>低群SDS得点高群>低群
		M	11.73	14.50			
		SD	2.63	3.40			
	老年群	N	136	66	年齢群× SDS高低	2.98	
		M	14.09	15.42			
		SD	2.92	3.71			

SDS得点が41点以上を高群、40点以下を低群とする

*p<.05 **p<.01

IV. 考察

1. 未来に関する想起内容

青年、中年、老年の内容分析の結果において、【現在の生活の継続】【これからの生き方】【家族】【健康や病気】【死や死後】【分からない、考えない】というカテゴリーが共通して得られた。まず【現在の生活の継続】というカテゴリーは、未来とは今ある日常の継続であり、その生活をどのように過ごすかという意識が表れていると考えられる。【これからの生き方】というカテゴリーは、今後をいかに生きていくかという精神的態度を示している。【家族】というカテゴリーには、子どもや家族、老親に対する思いが表れており、【健康や病気】というカテゴリーからは、いつまで元気でいられるかという思いや、病気になることへの心配が表れていた。【死や死後】というカテゴリーは、いつまで生きられるかという思いや、死に方への希望、死後の世界への思いが示されていた。【分からない、考えない】というカテゴリーからは、＜未来のことは考えていない＞という、未来を考えるよりもむしろ今を生きることによって価値を置いている思いや、＜考えても仕方がない＞というあきらめを含むような思い、＜どうなるのか分からない＞という先の見えない不安を含んだ思いが表れていた。

青年、中年、老年でコードの数を比較してみると、青年は、[就職]や[これからの生き方]を挙げる者が圧倒的に多かった。次いで、[休日の過ごし方]や[試験]といった真近な未来、[結婚]という人生上のライフイベントが挙げられていた。このように、青年にとって未来とは、明日、すぐ先といった近未来のことや、今後待ち受ける就職という大きな人生の選択を意識しながら生活していることが伺えた。

中年においては、[これからの生き方]、[子ども]や[家族]を挙げている者が圧倒的に多かった。木本¹⁶⁾は、中年期における希望とは、自分のためだけに生きることよりも仕事を通して社会に貢献することや家族のために生きることと関連していると述べている。エリクソンによる中年期の発達課題は、世代性対停滞性とされる。世代性とは親や指導者であることを受け入れ、次世代の確立や指導に関心を持ち、世話をしていくことを通して社会に貢献することを指す。中年期は、成人病や閉経、更年期障害といった身体的変化、仕事では責任が重い仕事に就いたり、時代にあったものを必要とされることへの適応といった社会的変化、子どもの自立によって親としての役割が終わり、それとともに始まる夫婦二人での生活や老親との死別といった家

庭内の変化が起きる時期である¹⁷⁾。つまり本研究の対象者においても、仕事、子どもや家族への世話を通して、自分を成熟させるとともに、近づいてくる将来という[老後]に向けてこれからの人生をどう生きていくかという意識を持っていることが伺えた。

老年は、[老後][これからの生き方][健康][病気][人生の終わり方]などが多く挙がっていた。木内ら¹⁸⁾は、高齢者が考える終末期の希望として、自然にほっくりといった「死に方」や、自宅で静かにといった「死ぬ時の環境や状況」、そして死ぬまで元気で自立してといった「死ぬまでの身体的状態や生き方」などがあると述べている。本研究でも＜人の世話にならないようピンピンコロリでいきたい＞＜どんな死に方をするか＞といった[人生の終わり方]について挙げられていた。

そして本研究の問いであった未来を考えた時に自発的に「死」が浮かんでくる年齢段階とは、ほぼ老年になってからであることが示された。中年は、[老後]は浮かんでくるが、[残りの命]について言及したのは1名のみとわずかであった。老年になると、[老後]について＜一人暮らしになったときの不安＞や、[家族]について＜自身の死後において残された配偶者のこと＞といった自身や家族に対する不安が出てくるとともに、[人生の終わり方]が意識される。また、[残りの命]にあるように＜いつまで元気でいられるか＞といった「いつまで」「あとどれくらい」というコードや文言が見られた。この「いつまで」「あとどれくらい」という人生の終いまでの有限性を感じることで、その先につながる「死」の自発的な意識へとつながり、それと同時に、残された時間を「いかに生きるか」という生き方への関心や追求がなされるものと考えられた。

2. 死の不安、死に対する態度の年代比較

本研究において、青年群は、DAS、「死の恐怖」因子において、他の年齢群と比べて得点が高いこと、「積極的受容」因子、「中立的受容」因子、「回避的受容」因子については他の年齢群と比べて得点が高いこと、SDS得点が他の年齢群より高いことが示された。

中年群は、DASや「死の恐怖」因子の得点は老年群に近く、「積極的受容」因子、「中立的受容」因子、「回避的受容」因子については青年群に近いことが示された。

老年群は、DASや「死の恐怖」因子の得点は低いこと、「積極的受容」因子、「中立的受容」因子、「回避的受容」因子については他の年齢群と比べて得

点が低いことが示された。

まずこの結果と、先行研究を比較する。死の不安については、高校生および30～60歳の成人のDASを比較した結果、成人の方が低かったことが見い出されている¹³⁾。また、死に対する恐怖は60歳位までは加齢に伴い低下し、それ以降は経年変化を示さない¹⁹⁾という報告や、老年群は青年、中年群に比べて「死の回避」「逃避型受容」「接近型受容」が高いという結果⁷⁾を得ている。本研究の結果は、これらの結果を概ね追従する形となった。以下に、本研究で得られた、青年は死の不安や恐怖が高いこと、中年は死の不安は青年に近く受容は老年に近いこと、老年は、死の不安や恐怖が低く受容が高いことについて年代別に検討する。

青年期の発達課題について、エリクソンはアイデンティティの確立であるとした。アイデンティティは青年期で完成し固定してしまうことなく、人のライフサイクルにそってそのつど組み替えられ、より包括的な新しいアイデンティティが求められ続ける、いわば不断の運動として理解される²⁰⁾。多くの研究から青年期それ自体が本来的にストレスに満ちているわけではなく、その時期をストレスに満ちた中で過ごす人もいること²¹⁾が明らかとなっている。村瀬²²⁾は、青年期は旺盛な生命力、柔軟性があり、かつ役割や責任から比較的自由的な境遇にあるため内外からのストレスに対処する条件にも恵まれている一方で、青年は強い不安、葛藤、緊張にさらされやすい条件を多く備えていると述べている。本研究では、SDS得点について、抑うつ状態が乏しいとされる40点以下であった者は、青年が25%、中年が52%、老年が67%であることから青年の抑うつ感の高さが伺えた。青年期という時期は親から離れ、日々のスケジュールや経済的な管理を自分で行うことが増える。何か困ったことがあったときには親にすぐに頼るのではなくまずは自分で解決の糸口を考えてみることになる。友人の付き合いも濃いものとなり、アルバイトやボランティア活動でさまざまな人と関わるようになり交友関係も広がる。このように親や環境に守られていた児童期からは変化し、自身で自身をマネジメントしていくことになる。このような青年の親からの自立という局面において青年が感じる葛藤や緊張が、抑うつ感の高さにつながったと考えられる。しかし、抑うつ感の高さはすなわち、死の不安や「死の恐怖」の高さに通じるか、という点については疑問が残る。隈部⁷⁾は、青年や中年の死の恐怖の高さや受容の低さについて、自分の死に対するリアリティが乏しく死について考えることが少ないことを理由と

して挙げている。本研究における未来に対する想起内容においても、「死」を想起した者は1名であったことから、隈部が述べているように、青年は死に対する具体的なイメージが沸きにくいいため、漠然とした死の不安、恐怖を感じ、それらの得点が高くなった可能性がある。

中年期は、青年期を経て、老年期に移行していく時期である。青年ほどDASや「死の恐怖」因子の得点は高くないが、老年ほど「積極的受容」因子、「中立的受容」因子、「回避的受容」因子はないという状態にある。すなわち自身の心身の老化などさまざまな喪失との直面により、死の具体性は青年よりも増し、死への不安や恐怖は低くなるが、死を受容しているかといえ、まだそのような段階ではないということである。岡本²³⁾は、中年期は自分の生き方や自己のあり方そのものが問われる岐路が存在し、それがきっかけとなって自分の生活、生き方、働き方の軌道修正が行われ、中年期以前よりも安定した肯定できるアイデンティティが獲得されるプロセスを「中年期のアイデンティティの再体制化」と呼んでいる。本研究の未来に対する想起内容においても中年期になると[老後]が表れるように、これからの人生をどう生きるか考える時期である。しかし死を身近なものとして受け入れようという態度までには至らないと考えられる。

老年期は、自身の心身の変化を感じたり、定年退職という社会生活上の役割から降り、おのずと「終い」を意識せざるを得ない状況が起きてくる。よって、「死」に対しては青年、中年よりも具体的なイメージを持つ出来事が増える。このように死があることを人生上の過程の一つとして受け入れることは、エリクソンのいう老年期の発達課題¹⁷⁾とされており、統合に向けた人生の歩みが表れたものと考えられる。

3. 性別、死別経験、抑うつ要因が、死の不安、態度に与える影響

まず、性別については、DASおよび「積極的受容」因子において、男性よりも女性の方が因子の得点が高かった。DASの項目は「私は死ぬのがとても怖い」「死について考えても私は決して思い悩まない」などであり、「積極的受容」因子の項目は「死は、永遠の幸福な場所への道だと思う」「私は死後の世界を楽しみにしている」などである。本研究の老年の対象者は、男性は一人暮らしの割合がかなり少なく、女性は一人暮らしや子との同居が多かった。このことから、老年女性は死別、離別経験があると考えられ、ま

た中年女性においては、老親の介護の経験もある年代であることから、親の老いを見る、知る機会があることが考えられる。このように、親しい人が老いていく姿を見たり、亡くなることを経験した場合、親しい人が逝ってしまった死後というところは悪いところではないと思いたい気持ちと、死ぬことには不安があるといった気持ちが混在しているのかもしれない。

次いで、死別経験に関しては、いかなる因子にも影響を与えなかった。死別経験がある人はない人よりも死を具体的にイメージでき²⁴⁾、死別経験は人格的発達につながる²⁵⁾とされる。本研究において、親しい人の死別経験を問うたが、死別するという事は、故人との関係を振り返り、故人とともに過ごした時間や会話を思い出す中で、悲嘆や後悔、懐かしさや当時感じた感情、自分自身が残って生きている意味を考えるとといった心の活動が起こると考える。よって、本研究で用いた尺度で見出した死の不安や態度には死別経験は影響しなかったが、他者の死が自身の死を考えるにおいていかに影響するかについては、他の死に対する態度を測定する尺度を用いて引き続き検討を行う必要がある。

さらにSDSについては、「死の恐怖」因子および「回避的受容」因子において、抑うつ低群よりも抑うつ高群の方が因子の得点が高かった。また、中年群、老年群においては、SDS得点低群よりも高群がDAS得点が高く、「死の恐怖」因子の得点も高かった。「死の恐怖」因子の項目は、「苦しんで死ぬのが怖い」「人生は短いと思うと心が揺らぐ」などである。SDSは身体的側面と精神的側面の両面を測定する尺度であることから、中年、老年のSDS得点が高い人は、心身の快活さや日常生活への満足感や充実感や意欲が持ちにくい状態であると考えられる。中年期には心身の変化も起こる時期であることから、そのような心身の不調がある場合、「死」の不安や恐怖につながると考えられた。

V. まとめと今後の課題

本研究を通して、未来に対する思考の内容分析から、青年群、中年群において1名ずつくいつまで生きられるか>というコードがみられ、老年期はこれに加え、<どんな死に方をするのか>といった死への具体性が表れてきた。このことから「死」という考えが自発的に浮かんでくるのは老年期からであると結論づけた。また、DAPの「積極的受容」「中立的受容」「回避的受容」は他の年齢群に比べて老年期で高くなること

が示された。老年は、身体的変化、定年退職、親しい人の死などを経験しやすくなる時期であるが、そのような経験を通して、「死」が身近なものとして感じられると考える。その感じ方、受容の仕方は積極的、中立的、回避的とさまざまで、一様とはいえない。

本研究では、内容分析を用い自由記述を質的に分析した。よって、対象者が回答欄に何を言葉として書かれるかということや自由記述から読み取れるものに頼ることになる。また対象者の中には、考えていても言葉にすると死に直面することになり不安や恐怖を感じるため、書かなかったという人もいる可能性がある。このような点で、紙面に書かれた言葉が、本研究の問いであった「言葉として自発的に表れる年齢段階を知る」ことにおいて十分であったかという点では疑問が残る。今後、本研究と同様に自由記述から分析を行う際には、<いつまで生きられるか>というコードにはどのような思いが込められているか、また中年群から現れていた[老後]にはどのような内容が含まれているかが理解できれば、より豊かなコードが得られ、新たな知見も得られるであろう。また、今回は量的に検討を行ったが、未来に対する想起内容や、死に対する感情、考え方については、個人の経験、体調などもあるため、個人差があることには十分注意を向けておく必要があると考える。

引用文献

- 1) レヴィン (著) 猪股佐登留 (訳) : 社会科学における場の理論、誠信書房、東京、1974.
- 2) 都筑学 : 時間的展望に関する文献的研究、教育心理学研究、30 (1) 、73-86、1982.
- 3) 佐々木直美 : 高齢者の過去・現在・未来に関する想起内容とそれにともなう感情が精神健康に与える影響、山口県立大学学術情報、(13)、1-13、2020.
- 4) Gesser G, Wong PTP, Reker GT : Death Attitudes Across the Life-Span: The Development and Validation of the Death Attitude Profile (DAP) Journal of Death and Dying, Journal of Death and Dying, 18, 113-128, 1987.
- 5) 河合千恵子・下仲順子・中里克治 : 老年期における死に対する態度、老年社会科学、17(2)、107-116、1996.
- 6) Wong, P. T. P., Reker, G.T., Gesser, G. Death Attitude Profile—Revised: A multidimensional measure of attitudes toward death, In R. A. Neimeyer (Ed.), Series in death education, aging, and health

- care. Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application, 121-148, 1994.
- 7) 隈部知更：日本人の死生観に関する心理学的基礎研究--死への態度に影響を及ぼす4要因についての分析、健康心理学研究、19(1)、10-24、2006.
- 8) 丹下智香子：青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討、心理学研究、70(4)、327-332、1999.
- 9) 丹下智香子・西田裕紀子・富田真紀子他：中高年者に適用可能な死に対する態度尺度(ATDS-A)の構成および信頼性・妥当性の検討、日本老年医学会雑誌、50(1)、88-95、2013.
- 10) Zung,W.W.K.: A self-rating depression scale, Archives of General Psychiatry,12,63-70, 1965.
- 11) 福田一彦・小林重雄：自己評価式抑うつ性尺度の研究、精神神経学雑誌、75(10)、673-679、1973.
- 12) Templer D. I.: The Construction and Validation of a Death Anxiety Scale, The Journal ofPsychology, 82, 165-177, 1970.
- 13) 岡村達也：「死に対する態度」の研究--青年と成人との比較、東京大学教育学部紀要、23、331-343、1983.
- 14) 木村正治・広海義介：大学生の死の不安に影響を及ぼす因子について-「死の教育」のための基礎的調査の分析-、熊本大学教育実践研究、7、1-8、1990.
- 15) Krippendorff K. (著) 三上俊治 (訳)：メッセージ分析の技法「内容分析」への招待、勁草書房、東京、1989.
- 16) 木本陽子：中年期の「希望」の心理について、臨床教育心理学研究、31(1)、77-82、2005.
- 17) バーバラ、M. ・フィリップ、R. (著) 福富護 (訳)：新版 生涯発達心理学 エリクソンによる人間の一生とその可能性、東京、川島書店、1988.
- 18) 木内千晶・吉田千鶴子：高齢者の希望する終末期の迎え方、岩手県立大学看護学部紀要、6、77-82、2004.
- 19) 丹下智香子・西田裕紀子・富田真紀子他：成人中・後期における「死に対する態度」の縦断的検討、発達心理学研究、27(3)、232-242、2016.
- 20) 西平直：エリクソンの人間学、東京、東京大学出版会、1993.
- 21) Coleman J, Hendry L：白井利明・若松養亮・杉村和美 (訳)、青年期の本質、京都、ミネルヴァ書房、2003.
- 22) 村瀬孝雄：アイデンティティ論考-青年期における自己確立を中心に-、東京、誠信書房、1995.
- 23) 岡本祐子：中年期の自我同一性に関する研究、教育心理学研究、33、295-306. 1985.
- 24) 尾方綾・岡本祐子：死別体験の有無および死に対する態度と「死」のイメージとの関連、広島大学心理学研究、12、155-168、2012.
- 25) 渡邊照美・岡本祐子：死別経験による人格的発達とケア体験との関連、発達心理学研究、16(3)、247-256、2005.